
魔女と○○

えんとつ そーじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と○○

【Nコード】

N3722J

【作者名】

えんとつ そーじ

【あらすじ】

中世初期のヨーロッパをモデルにした、異世界ファンタジー。古代、神々は大戦を起こし、ほとんどが滅ぶ。しかし、一握りの生き残った神は地上に降り、人間と共に生きることを選ぶ。そんな神は戦を起こした元凶として”魔女”と呼ばれ、蔑まれた。子孫の一人、魔女のロザは神の力がないものの、独り、ひっそりと森——ではなく、町の外れに住んでいる。そこに、ケガをした少女を連れた青年二人が訪れる。 <現在、更新停止中><大改稿の予定あり><※HPからの転載です>

昔話

——それは遙か昔の、建国王の神話。

かつてこの世界には、人間と神が住んでいた。

神々は大地を支配し、人間は神を崇拝した。それによって秩序は保たれていた。

だが、神々は同族同士で大戦を始めた。被害は神界だけで収まらず、ついには平穏を願っていた人間界にも被害をもたらす。

やがて、大戦は収束した。けれど、神界は崩壊し、人間界も荒廃していた。

生き残った神は少なかった。また人間もいわずもがな。

そうして神界は失われ、神々は地上へ降り、人間と共に生きることを選んだ。

人間界は不毛の地と化していた。

わずかな緑があれば、それを奪い合い、争った。人間界でもまた、争いが絶えなかったのだ。

地上に降りた神々はすでに神格を失っており、なす術なく人間にまぎれて生きた。

そんな腐りきった世界を救ったのは、この国の建国王だった。

彼は地上へ降りた女神の力を借り、争いを抑え、その手腕により秩序を取り戻した。

生まれ変わった大地は人々の心を潤した。

平和へと導いた彼を人々は奉った。

そして彼は、国を建て、王となる。

彼は生涯賢王であつたという。

しかし、彼の傍らにいた女神は、建国後、姿を消した。

代わりに、一人の聖女が彼の隣で、王を支え続けた。

神であつたものたちは、”魔女”と呼ばれ、それでも人として人生を送り、子をなして死んでいった。時間とともに彼らの子孫の多くは、自らが神の血をひくことを忘れ、また知るものも、大地を混沌へと貶めた罪を隠すためにその血筋を心に留めた。

昔話（後書き）

基本、ほのぼのうだうだした話となっています。

魔女が登場するくせに、魔法はほぼ皆無。また、劇的な展開（作者的に）はない予定です。視点も中心がコロコロかわります。ご了承くださいませ。

主人公の恋同様、亀更新（不定期）ですが、よろしく願います。

序章

少女を抱きかかえる腕には、真っ赤な血が滴っていた。

そこは、深い森の中だった。夜の帳はまだ下りていない筈だが、日は射し込んでこない。

「…姫、姫っ、目をあけてください」

銀鼠色の髪 of 青年の懇願もむなしく、腕の中の少女はぐったりと目を閉じている。

青年は髪を揺らし、血にまみれる美しい少女を抱きしめた。

歯をくいしばる。どう考えても、こんな森の中に医者などいるはずがない。しかし、腕の中の少女は、もと来た道を辿って、自分の知る医者を訪ねている間に死んでしまっただろう。それがわかっているけれど、青年は今、それ以外の術を持ち合わせてはいなかった。血が、絶え間なく流れ続ける。

青年は必死に頭を働かせた。

確か、町の中心街では医者が居を構えているときいたことがある。だが、そこまでの道のりを彼女が耐えてくれるだろうか。——自分の愛馬は少女と衝突し、倒れたままだというのに。

「俺の、せいだ——」

少女の金色の髪に、顔をうずめた。

その時。

「彼女が助かるところへ、連れて行ってあげようか？」

同情するでもない、淡々とした調子の声。

青年は勢いのままに、声の主を振り返った。

視線の先にいたのは、琥珀色の髪に青磁色の瞳の、美しいけれど無表情な青年。年のころはもうすぐ二〇といったところだろう。

見ず知らずの青年。けれど、眠る少女を抱えた青年は、彼が

天からの使いではないかと思った。神は、まだ自分を見放してはいなかったのだと。

「お願い、します…っ」

藁にでも縋る思いで深く頭をさげる。彼女が助かるというのなら。自分がしてしまった罪で、傷を負った彼女が癒えるならば。なにを引き換えにしてもかまわないと、この時は思っていた。

魔女と来訪者

1（前編）

「…事情はわかった。その少女を手当てをしてほしい、ということだね」

突然の来訪者たちに、魔女は神妙にうなずいた。

そこは、町外れの小さな一軒家の玄関口。この魔女は常々人間と極力関わらないよう自給自足に心がけているため、家の周囲は菜園で囲まれている。なぜか来訪者たちの背後に広がる菜園から、奇妙な鳴き声——キューケケケのように聞こえる——が響くが、深く考えてはいけなのだろう。

魔女の家、ということもあり、美の薬を求める女こそ来ることはあるが、男複数の来訪はめったにない。来たとしても、ろくでもないことが多いから、魔女は関わりたくないと思っていた。しかし、今回は無視できない一件だった。

「…わかった。わたしは魔女だが薬師だ。引き受けよう。——だが」
そこでようやく魔女は、男に担がれた紅に染まった娘ではなく、二人の青年にうろんな眼差しを向けた。

「君たちは騎士と貴族に見えるが…そんな知識ある者たちが、なぜその娘をわたしのもとへ連れてきた？」

魔女の疑問ももつともだった。彼女は魔女であり薬師だ。——つまり、薬師であって医者ではない。ここまで酷い傷ならば、本来は医者へ連れていくべきだろう。

すると、銀鼠色の髪、騎士の装いをした青年が口を開く。

「医者は町の中心街にしかないと聞いています。馬はつぶれてしま…い…そこまで彼女を担いでいくと、命に関わると思って…」

魔女は眉根を寄せた。町の中心街にしか医者がいない？

「いや、いる。森の向こうにある隣の領地は中心街にしかないらしいが、ここはいる。そうか…騎士、君は隣の領地の者なのだね。」

で、黄金、君も同じか？」

黄金、と呼ばれた琥珀色の髪の青年は、目を瞬かせた。なぜに黄金？

とりあえず、質問には答えておく。

「私は知っていたよ。この土地の領民だからね」

騎士は目を丸くし、隣に立つ男を見た。知っていたのなら、なぜ彼は医者のところではなく、この魔女のもとへ連れてきたのだろうか。

騎士と魔女の物言う視線に気づいたように、黄金は無表情だった顔を笑ませた。

「魔女殿、あなたなら必ず救ってくれると思ったからだよ」

その花のほころぶような笑みと言葉に、二人はあっけにとられる。だが、うっかり長話をしてしまったが、緊急事態であることを思い出す。

「まあいい。さっさと彼女を中へ運んでくれ。黄金は裏へ行って、井戸水を運んできてほしい」

騎士は頷いた。しかし、黄金はうなずくより先に、首を傾げた。

——さっきからずっと気になっていたが、なぜ自分は黄金と呼ばれるのだろうか。

魔女は手早く少女の傷の消毒と止血を行い、寝台に横たえさせた。深く眠ってはいるが、重傷であることには変わりはない。けれど、重体というわけではないようだ。出血多量の心配も今はないため、意識さえ戻れば問題ないだろう。

魔女は診終えた少女の髪を一なでし、青年二人を振り返る。

彼女は気づいていた。眠る金髪の美少女は、身なりからして間違はなく貴族の令嬢だろう。そして銀鼠の髪の青年は所作から、どうみても騎士だ。琥珀の髪の青年も、身のこなしや服装からして貴族だろうと推測できる。はっきりいってあまり関わりたくない人種であるし、もし怪我をした少女の存在がなければ、門前払いしていた。それでも、客人となったのには変わりはない。ゆえに、二人に席をすすめ、あたたかい紅茶を淹れた。

「ありがとう」

黄金が無表情でそういうのに対し、騎士は不安に瞳を揺らしながら礼をのべる。魔女は一つ息をつき、いじわるをやめた。

「焦らしてすまなかったね。――安心するといい。目が覚めれば、もう彼女は大丈夫だ。傷がある程度ふさがったら帰るといい」

彼女の言葉に、騎士は安堵した。

その様子に、魔女は少しばかり罪悪感にかられ、呟いた。

「魔女のもとに来た君たちを、少しばかり警戒しているんだ。わたしは極力、人間には関わらないようにしているからね」

青年二人は正直すぎる魔女を見つめ、目を瞬く。

三拍間を置くと、騎士は端整な顔で微笑んだ。

「いえ、無理ありません。魔女を酷く扱う者もいる。でも俺は、突然押しかけてしまったのに、手当てから看護まで引き受けてくれたあなたに感謝しています。――そうだ、自己紹介がまだでしたね。俺は隣の領地の騎士を先日までしていました。名はイヴァンといい

ます。彼女——マーガレット姫の目が覚めるまで、よろしく願います」

魔女は苦笑する。彼の心根の優しさが伝わってきた。——けれど、だからこそ人間と距離をあけてきたのだ。

「ああ。ではこれからはイヴァンと呼ぶよ。で、黄金、君は？」

黄金は紅茶の入ったティーカップから顔をあげた。なにやら無表情の中に不機嫌が窺えるような気がするが、気のせいだろう。

「……魔女殿、なんで私を黄金と呼ぶんだ？」

青年はずっと疑問に思っていたことを口にする、魔女は「ああ」としたり顔で一人うなずた。

「わたしは君の名前を知らないから、愛称で呼ぶしかなくてね」

「いや、だからその黄金の意味がわからない」

彼の意見ににイヴァンも納得した。黄金とは、金銀財宝のあの黄金だろうか？ それとも、彼の髪の色が似ているからだろうか？

しかし、魔女は眉をあげた。まるで、「なぜわからない」とでもいいだけだ。

「言っておくが、金銀財宝の黄金ではないよ？」

——はずれた。イヴァンは思わず顔を背けた。

一方、黄金と呼ばれる青年は眉間に皺を刻む。

「じゃあ、どういう意味？」

「君の顔は黄金比なんだ。だから、黄金だ。かの有名な砂漠の国の美女もそうだったらしい。ぜひ誇ってくれ！」

魔女は黄金の真正面に立ち、力強く彼の肩を叩いた。

二人の青年は今さらながら、気づいてしまった。彼女はなかなかの変人ではないだろうか。しかも、魔女だとか、そういう問題を抜きにした。

黄金は溜息をつき、「フローと呼んでくれ」と頼んだ。本当の名前は言いたくないけれど……黄金は嫌だった。

——あれから数日。眠り姫、マーガレットの容態は安定している。けれど、予断を許さない状況であることは変わりないらしく、時間を置いて彼女の容態を確かめなければならない。

寝台で横たわるマーガレットの金髪を優しくなで、イヴァンは眉尻を下げて笑んだ。

「…また、来ます。——姫」

ここに来て、フローとイヴァンはロザの驚くべき生活を目の当たりにする。

ちなみに”ロザ”というのは、魔女の名前だ。愛称であるのだが、本名を訊ねても彼女は頑として語らなかった。「名を悪用しようなんて考えていない」と伝えても、ロザは首がもげるほど横にふり、顔を真っ赤にして口ごもらせた。

「恥ずかしすぎる名前なのだよ」

成人男子として、淑女にこれ以上言及はできまいと、結局愛称で呼ぶことで、その場はおさまった。

さて、話は戻る。

魔女のイメージ、というものがフローとイヴァンを含めた一般人にはある。

魔女の集会があるとか、魔法を使うとか、そういったものである。うち一つに、『魔女は夜行性である』というものもあるだろう。

しかし、彼女に至ってはあたっているような、あたっていないような——つまり、判断に困るのだ。

とりあえず、フローとイヴァンは、これだけは断言できる。

魔女は夜行性説。

これは彼女においては適合しない、と。

ロザのその生態を知ったのは、青年らが彼女のもとを訪れた翌朝のことだった。

*** *** ***

フローとイヴァンは居間に布を敷いて眠っていた。

ロザの家は小さいため、寝室、庖厨、居間の三部屋と『関係者以外立ち入り禁止』札のかかる謎の部屋、そして廁・浴室しかない。一人では十分だが、突然の泊り客三人が加わるとなると、いささか狭く感じる。

まだ鶏も鳴いていない時刻。騎士であるため、早起きに慣れているイヴァンがなにやら頭上に気配を感じた。眠たい眼をうつすらあけると…そこには、魔女がフライパンと麵棒を持って立っていた。「っっ!？」 うわぁ!」

イヴァンは叫びながら飛び起きた。

「なななっ。ロザ!？」

焦るあまり、言葉にならない。

深呼吸して、もう一度発したかった言葉を口にする。

「な、なにやってるんですか!？」

するとロザはフライパンと麵棒を持った手を腰にあて、溜息をついた。

「イヴァン、敬語はやめてくれ」

「え、あ、はい…じゃなくて、すまない」

「謝ることはないよ」

そう言ってロザは苦笑した。本当に真面目な青年だ。

「で、ロザ、その両手のものは…?」

蒼い顔でイヴァンは重ねて訊ねてみる。――魔女はカンニバリズ

ムだと耳にしたことがあるが…自分たちは食べられてしまうのかも
しれないと、思った。

冷や汗が背筋を伝う。

（姫、助かった命ももうお終いのようです）

そうか、粹のいい人間を求めていたのか、と一人合点するイヴァ
ンに、ロザは眉を顰めた。

「…なにを考えているんだ、君は。そんな情けない顔しなくても、
誰もとって食べようなんて思っていないよ。ほら、そんなことよりも
さっさとフローも起こして」

イヴァンはロザには失礼だが、死ぬほど——本気で安堵した。
そして隣で眠るフローを揺さぶる。

ぐっすり眠っている顔は天使のようだった。

「フロー、起きろ。おい、フロー」

けれど、彼は起きない。

早くも痺れをきらしたロザが、フローの隣に腰を下ろした。だが
——おろしたのは腰だけではなかった。

ゴンツ、という鈍い音が部屋に響く。

「つつ！　　いっ痛——」

麵棒で殴られ、飛び起きたフローは患部をおさえて呻く。

涙目で視線をあげた。

「なにをするんだ！　私のこれまで培ってきた知識が耳の穴から抜
けたらどうしてくれる！」

怒る姿も麗しい。が。

「…俺に言っただうする。やったのはロザだよ」

イヴァンが呆れたように首をふると、フローは視線を彼から魔女
に移す。

ロザは悪びれもせずふん、と鼻をならした。

「なかなか起きない君が悪い…かもしれない」

中途半端な自己弁護だった。

フローは慥然と反駁する。

「私は褒められてのびるんだ」

：的が見事に外れた言葉だった。さすがのロザも理解に苦しんだらしく、瞑目して眉間に人差し指をおいた。

彼女の反応に、患部が若干盛りあがっている青年は、無表情で前言につけたした。

「早起きしない私に、愛の鞭というのを見舞ったんだろう？」
「……………」

魔女は口をあんどぐりあけた。彼女は、彼の思考回路を理解できるはずもないことを理解した。

「おめでたいな、君は。ある意味うらやましい」
「ありがとう」

嘆息したロザにフローは礼を言ったが、会話が成り立っているように成り立っていない気がする。唯一の傍観者だったイヴァンだけが顔を引き攣らせていた。

眠気眼で顔を洗い、着替えた青年二人は、ロザと共に菜園に出た。

ロザは仁王立ちで彼らを待ち構えていた。

無言で鎌を二人に渡す。フローとイヴァンは眠気がまだ残っており、うっかり鎌を受け取ってしまったが：なんとなく、この先の展開が想像できた。

つまり。この魔女は超がつくほどの朝型だったのだ。理由は簡単だ。家を取り囲む菜園の野菜の収穫は、朝が最適だということらしい。そして、その収穫に二人を手伝わせようということだ。

早起きの理由については、合理的ではあるが、魔女のイメージはこれで半壊したことはないうまでもない。

いまだ眠気ゆえに舟を漕ぐ青年らに、ロザは一喝した。

「君たち！ ほら起きなさい！ わたしの理念は『働かざるもの食うべからず』。このままだどご飯抜きだよ」

ぶんすか怒る彼女に、二人はおもむろに視線をやる。

——瞬時に彼らの意識は覚醒した。なんで、気づかなかったのだ

ろう。

そう思ってしまうくらいの威力ある、彼女の農作業姿。

(…なぜ、彼女は黒いスカーフでほっかむりをしているんだ)

二人は遠い目をした。

とりあえず、魔女に問うてみよう。

そして得られたのは、「わたしは肌が強くないんだ。日焼け防止と……あと、人間にあまり姿を見られたくない」との回答。

フローはあえて無言を貫き、魔女を無表情で観察することにした。彼女は黒茶のまつすぐな髪に、赤茶色の瞳をしている。目はクリッと大きく、肌は真珠のように白い。赤く色づく唇には愛嬌を感じる。誰がみても「かわいい」と評価するだろう。美人というには色が少しばかり足りない気もするが、客観的にみれば十分だ。

そんなことを思うフロー自身は、誰もがうらやむ神々しく美しい顔と、琥珀の髪、青磁色の瞳を持っているわけだが、自分のことにはあまり関心がないらしい。

フローはほっかむりをするロザに言った。

「それ、東の国の大泥棒みたいだな」

彼は褒めたつもりだった。なんといっても、その大泥棒はなかなか捕縛できないという。なんてすばらしい腕なのだろうか。

しかし、魔女は頬を膨らませ、その日一日、必要事項以外は口をきかなくなる。

イヴァンは共に過ごしてついに気づいてしまった。(…フローも変わった人間の部類か)と。

この後、二人は収穫を毎朝手伝わされることになる。

ちなみに、毎朝、近隣住民が菜園の魔女に視線をやり、「今日も早起きだねえ。いいことだ」とあたたかい目で見守っていることをフローもイヴァンも気づいているが、魔女には言わない。

魔女に自ら関わる人間は、いない。

それがイヴァンのそれまでの認識である。

しかし、実際のところはだろう。ロザ自身は深く関わるまいとしているらしい。

けれど、今日も野菜収穫の後、魔女の家に客が来た。

思い返してみれば、ここ数日魔女の家はにぎわっている。イヴァンの知る限り、原因は客人の女性客たちだった。

彼女らは皆、恋の悩みや美についての悩みを吐露していく。

「ここ、悩み相談所だったか？」

イヴァンの隣で、ぽつりとこぼしたのはフローだが、そう思ったのは彼だけではあるまい。

それでも、いつだってロザは真剣に考えた末、本当に真剣に考えたのか伺いたくなる、一応合理的な答えを述べる。

…その日来た女性の悩みは肌荒れだった。

ロザは答える。

「栄養のバランスが崩れているんじゃないかな？ レモンやミルクをとってごらん。あと、鮫のヒレとか」

相談者は納得したように頷き、上機嫌で帰って行った。

ただ、それを聞いていたイヴァンだけが（レモンとミルクはわかる。…鮫のヒレ？ どこで手に入れるんだろう）と心中で頭を抱えた。

ふと、眉間をおさえるのが自分だけであることに気づいた彼は、自分同様の一般的な反応を求め、隣にいるフローに視線を移す、と——彼は無表情だった。

（…読めない。そういえば、彼も変わった部類だったな）

イヴァンは孤独感を味わった。

内心涙を拭い、現実逃避のために思考にふけることにする。

それは、つい先日のこと。

魔女のもとへ、恋の悩み相談に来た女性がいた。どうやら、魔女という存在が古代の神の子孫だということで、神的な力を期待したようだ。

しかし、ロザは一刀両断した。

「あいにく、わたしは神の力を受け継いではないのだよ。それにね…」

続く言葉を、聞き耳たてていた二人の青年は予想した。

「神の力で、心を手に入れようと思えるべきではない。できても、してはならない」

こんな言葉を期待していたのだと、多分、思う。

ところがロザの口から出たのは、相談者およびフローとイヴァンも予想外の言葉だった。

「わたしの先祖は下級の美の女神なのだよ。力があつたとしても、なんの役にも立ちはない。はあ、わたしとしては、智の神やらが希望だったのだけれどね…」

(…へえ)

それしかイヴァンは考えられなかった。窺い見るに、おそらく客人も同様だろう。

隣のフローはだけは無表情で「ははは」と笑い、「わがままだな」と感想を述べていた。…そういう問題ではないだろう、とイヴァンは思ったが、利口にも口には出さない。

というか、彼女は薬師のはずなのに、なぜか薬を処方せずに、悩み相談で終わっている気がする。

そこまで考え、イヴァンは意識をもどす。

気がつけば、顔が笑っていた。

静かに目と閉じて内省する。

あっけにとられながらも、ゆっくりと流れる穏やかな日々。今までの、騎士であつた自分が体験できようはずのない世界だった。

現実を直視するため、再び目を開いてこちる。

「…そろそろ、姫の様子を見に行くか」

寝室の扉を開ける。

マーガレットの眠る寝台まで近寄り、指を彼女の頬に滑らせる。

——あたたかいことに、ほっとした。

（こんなに、心穏やかにいられるなんてな）

ふいに、イヴァンは目を伏せた。

——彼には、ずっと、逃げていたことがあった。けれど、他方でずっと追い詰められていたことがあった。

求められるものに気づいていたけれど、見て見ぬふりをした。自分の心に正直であれば、多くの人が傷つき、我慢すればすべては丸くおさまると、知って、いた。——それでも。

俯くと、銀鼠の髪がサラリと頬をなでた。

魔女と、琥珀の髪の青年と過ごして。ゆっくりとした日々の中で、様々な自分の感情に気づいた。そして彼女らといられることを、幸せだと、感じてしまった。今の自分には、それすらも罪であるのに。

「マーガレット姫…」

青年の掠れた声は、静かに、空気に溶けた。

魔女と来訪者

3 (後書き)

魔女の日常話が少し続きます。

それは、ある夜のこと。

ロザは入浴中のため、男二人は会話する。

今日の議論は、『ロザの魔女らしいところ』。

ロザと出逢って既に一日にして気づいたが、彼女はおよそ魔女らしいところが見当たらないのだ。

そこで、青年二人はなんとか知恵を絞ってみることにした。ちなみに、この絞った知恵の役立つ場所は、ない。

それでも暇つぶしとばかりに、思いつくものを一人一つずつあげることにした。

「そういえば、よく怪しいものの開発しているな」

フローは思いつくまま、あげた。

イヴァンも彼の言葉を吟味する。

「…確かに、そこは魔女らしいね」

二人は頷きながら、理想の魔女像を脳裏に描いた。

イメージの中の魔女。それは、大きな壺釜でぐつぐつと異様な薬品を作っている。材料は人魚の涙やら、実在するのも疑わしいものばかりだ。

次いで、彼女の開発する様子を思い起こした。

直後：双方共に斜め下を向いた。

数日前の事を思い出す。

立ち入り禁止札がぶら下げられた扉の部屋に、こもりきりになった魔女。

食事と廁と入浴という、人間の最低限の行動範囲には姿を現すものの、それ以外は例の部屋に閉じこもっていた。

あの甘党の彼女が、茶もせず、というところが留意する点だろう。

これは、よほどのなにかがあるのだと思った。

やがて、その札がようやくはずされる。

イヴァンとフローは、開かずの間の扉に駆け寄った。

——そこから現れたのは：なにやら誇らしげな魔女。手には、時計に見える物体があった。大きさは大皿程度ではあったが、妙に立体的なのが気になる。なにやら時計となっている盤面の上に、扉がついているが…。

イヴァンは恐る恐る訊ねる。

「それは、なんだい？」

魔女は、やっぱり誇らしげに何度も頷いた。よくぞ訊いてくれた！ という心の声が聞こえたのは、気のせいではあるまい。

そうして彼女は居間の壁にそれをひっかけ、使用説明を始めた。

「これは、時刻になるとこの時計の盤面上の扉が開き、人形が時刻を鳴き声の回数で報せてくれるのだ！ お、丁度九時か！」

カチリ、という分針と時針の音と共に、扉が開く。

刹那、魔女が言った通り人形が現れた。

「……っっ！？」

言葉を失い、顔面蒼白になるイヴァン。あのフローまでもが顔を引き攣らせている。

扉から現れたのは、上半身はヤギ、下半身は魚という、人形だった。メルヘンでかわいらしいデザインだったならば、まだよかった。しかし、ロザは写実性にこだわった。それこそヤギの髭一本一本にこだわるほどに。

結果：それは世にもおぞましい、「崇られる！」と叫びたくなるものとなった。一目見れば、人間を凍らせることくらいわからないだろう。

青年二人は固まっていたが、半身ヤギのそれは、彼らにかまわず鳴いた。

『メエ、メエ…』

声だけはまともだった。どうやら魔女にも、半身ヤギという謎の

生物の鳴き声まではわからなかったらしい。彼女は、黄道十二宮を時刻の象徴に言ったと言っていたが：どうしよう、時間の流れに恐怖を感じる。

以来、青年二人はその時計の魔の扉に目を向けることはない。

思い出ただけで背筋に震えが走る。イヴァンは気分を変えるため、次の提案試みた。

「ロザの魔女らしいところといえば！　しゃべり方はどうかな！？」
ある種の呪術道具のような時計を記憶から削除するため、青年二人は今度は脳裏に伝統的な魔女のしゃべり方を想像する。

それは、事その他古臭かった。時々「ケケケ」という笑いも含んでいるが、彼女に期待してはいない。不気味だからだ。

「気にしてなかったが：確かにロザの口調も魔女っぽいな」
フロアの同意も得られたため、入浴済みの本人に、直接訊ねてみることにした。

しかし、返ってきた答えは予想外のものだった。いや、もう彼女が予想外の存在であることを認めなければならぬ気がしてきた。
いわく。

「この家にある本を御伽噺がわりに読んでいたら、自然とこうなったのだよ」とのことである。

こうして、魔女特有のしゃべり方ではないことが判明した。

彼女の家にある本は、薬学書や科学書が多くを占めている。つまり、彼女のそれは、論文調だったのだ。

魔女は首を捻っていたが、とくに害がないとわかると、青年二人に入浴を促す。

「もうすぐ日が替わる時間だ。明日も早いし、水浴びしておいで」
フロアとイヴァンは魔女の言葉に顔をあげた。もう、そんな時間なのか、と思い――うっかり例の掛け時計を見てしまう。

そして今日も、魔の扉が開き、時刻を告げた。

無論、彼らがある種の呪いにかかったことは言わずもがなである。

フローは琥珀の髪をかき上げ、書物を閉じた。
現在、魔女はお茶の準備中であり、イヴァンは眠り姫の看病をしている。

いまだ目覚めない姫君。それに、なぜか不安と安堵の色を見せるイヴァンの姿に、フローは違和感を感じることがある。だが、口には出さない。――彼らのあれこれに、興味がないからだ。

フローはおもむろにこちる。

「やはり、所詮書物は書物ということか……」

イヴァンとロザの魔女らしいところ談義をしたことをきっかけに、魔女について調べてみることにしたわけだが……。

その本には、魔女の生態について書かれている。魔女の定義として夜中に集会を開くのだの、カンニバリズムだのあるが、今のところ、彼らの知る魔女にははずれっぱなしである。

鼻腔に届く、心地いい茶の香りに誘われて足を運ぶと、たどり着いたのは眠り姫の部屋。

茶と菓子がすでに用意されていた。

ロザは笑みをにじませる。

「ちようど呼びに行こうと思っていたんだ」

フローは無表情で問うた。

「今日は姫君の部屋で茶をするのか？」

彼の疑問に、ロザはもったいぶったように答えを焦らす。

時間の経過とともに冷める茶。さすがに痺れを切らした頃――魔女は人差し指をたてた。

「わたしは、マーガレット姫の目を覚まさせるべく、すばらしい考えが浮かんだのだよ」

「へえ」

フロアのそっけない返答に、マーガレットの傍にたたずんでいたイヴァンが苦い笑みをこぼす。どうやら、イヴァンは内容を知っているらしく、しかもその”すばらしい考え”は、すばらしいと言いがたいらしい。

決して促したわけではないフロアだったが、ロザは気にすることなく続けた。

「名づけて、『天岩戸大作戦』！」

「別に名づける必要もない気がするが」

「…細かいな、君は。まあいい。この作戦は、某東の国の神話をもとにしているのだよ」

「…つまり？」

ついその場の空気で、フロアは話の流れを促してしまったが、すっかり眉間には皺が刻まれている。

ロザはそんな彼をやはり気にとめることなく、仁王立ちをして答えた。

「その神話では、岩戸に引きこもった日の神を岩戸から出すために、そこの前でどんちゃん騒ぎをしたそうだ」

「で、その神様は戸をあけたのか」

「ご名答！　というわけで、フロア、イヴァン！　今日の茶会は姫君の前で行う！」

一応厚意ということがわかるため、イヴァンは曖昧に頷いたが…フロアはこめかみを揉んだ。なにかがずれている気がするが、どこがなのかわからない。それが彼女なのだ。ゆえに、おかしい点を指摘することもできない。

二人はとりあえず居間からわざわざ運んだ卓の席につく。

フロアは湯気なのぼらなくなった茶を啜りつつ、魔女を眺めた。そして、先ほど読んだ本の魔女の定義とやらと比較してみることにした。

（夜行性と…カンニバリズム、か。………まったくもって的外れも甚だしいな）

まず、目の前のこの魔女は、超のつく朝型だと身を持って体験したし、今の卓の上を見てほしい。

甘い栗の糖菓とミルクの入った、さっきまであたたかかった筈の茶だ。一体これのどこがカンニバリズムだというのか。ぜひとも、先ほどの本の著者にツッコミをいれたい。

苦い気持ちを静めるため、口の中に糖菓を含むと、砂糖の甘さが口内に広がる。顎の関節が痛くなるほどの甘さから逃れるため、今度は茶を飲んだ。

「本当に甘党だな…」

つい、魔女に呆れを含んだ視線を送ってしまう。

この茶菓子うんぬんは、ロザの嗜好なのだ。

「文句があるなら食べるな」

子どもの様に頬を膨らませて怒る姿に、フローとイヴァンは思わず笑ってしまった。

普段笑わないフローと、いつもは苦笑ばかりのイヴァンに笑われ、ロザは赤面しながら狼狽した。

「ななななにがおかしいのだ！ 甘党でなにが悪いっ」

「いや、別に悪くない」

口元を手を隠しても、笑っているのがわかる彼らに、ロザは眉根を寄せる。

すると、フローは頬杖をついて語りかけた。

「多くの人は、魔女は深い森の中に住むものと思っているんだろうな」

突然の言葉に、ロザは目を丸くして「うん？ まあ、そうだろうな」と答えてみる。脈絡のなさに彼を見つめてみるが、フローは尻力を緩めただけだった。

めったに見る事のない、彼らの表情。ロザにとって、稀な事態に慌てふためく自分が恨めしかった。

そんな彼女を眺めて、フローは目を細める。

それは、ついこの間の話。

彼女はやはりほっかむり姿で、町へ買出しに行った。自給自足をするための菜園があるにも関わらず、帰ってきた彼女の両手には、山盛りの砂糖と小麦粉、米粉。

(…甘党なのか)

そう気づいた。

よくよく考えてみれば、彼女は毎食後、手作りデザートを楽しんでいる。今は米粉を使ったお菓子に凝っているらしい。

いっそのこと、わずかな米粉くらいは自給自足してみたらどうだろう、と案をだしてみた。これに対する彼女の答えは「…やってみようと思ったのだよ。でも、田んぼに悪ガキどもがドジョウを放つてね。網で毎日すくったが、毎日悪ガキどもがドジョウを放ちにくるんだ」。

なんとも不憫な魔女である。子供に恐れられるはずが、遊ばれてどうする。そして、どうしても気になっていたことを訊いた。

「格好はやっぱり、ほっかむりなのか？」

ロザは、「当然」と言わんばかりに見つめ返してきた。

フローとイヴァンは、東の国の某ドジョウをすくう踊りを思い出し、爆笑をこらえるのに必死だった。本気で腹筋が筋肉痛になると危機感を抱くほどに。

「…ん？　まだなにか文句があるのか？」

少しばかりむっと眉を寄せる魔女に、フローは普段のように無表情を装った。

「いや、別に」

ロザはなにか言いたげだったが、どうやら糖菓の誘惑を優先させることにしたらしい。

ティーポットが空になる頃。

魔女は、眠ったままの姫君を見つめ、ぽつりと呟いた。

「…いい作戦だと思ったのだが」

フローとイヴァンは（本気だったのか）と心中で思ったが、やはり口には出さなかった。

予想通り目覚めなかったマーガレット。なんといっても、彼女は天岩戸の神のように、自分で閉じこもったわけではない。怪我が原因で意識がいまだ戻らないのだ。茶会で眠りがさめてたまるか、と医者ならばいうだろう。

それでも、ついこの不思議な魔女に付き合ってしまうのは――心地がいいからなのかもしれない。

ロザと出逢うまでの日々は、自分の心を押し殺さなければならぬことばかりだった。

けれど、今はどうだろう。振り回されているのは確かなのに、とても毎日が穏やかに、愉しく過ぎてゆく。

――いつか、マーガレットの目がさめたら、イヴァンもフローも、マーガレットも、この家から出て行かねばならない。彼らには帰る場所があるのだから。

ここは彼らにとって、限られた幸福なのだ。

「ロザ、片付け手伝うよ」

「じゃあ、フローと卓を居間に戻してくれ」

イヴァンに、フローは「余計なことを」と言わんばかりの視線を送った。

食器を持って庖厨へと姿を消す魔女を見送り、イヴァンはぽつりと呟いた。

「こんなやりとりも、そのうち思い出になるんだろうな……」
フローは目を細めた。

「……思い出にするかしないかは、君次第だ」

思わぬ言葉に、イヴァンは顔をあげる。彼の言葉の意味が、よくわからなかった。

しかし、フローはイヴァンを見据えただけだった。

その意味深な行動に目を瞠るイヴァンの横を、フローは通り抜けた。

そして、一人取り残されたイヴァンは、しばらくして気づく。

(……あの男、片付けから逃げたな)

やはり彼は掴みどころのない男だと、再認識する。

フローは庖厨に立つ魔女を、背後から見つめる。視線に気づくことのない彼女に、無表情とは違う、真摯な顔をつくる。

——彼女の家に来てから、ロザの様々な姿を見るようになった。そのすべてが、思わず笑わすにはいられないことばかりだ。

——きつと、彼女は善意で三人の来訪者を泊めているのだろう。それを知ってなお、フローは彼女の善意を利用する。

ロザが人間と壁をつくっていることに気づいたのは、いつだっただろうか。

彼女はイヴァンとマーガレットの関係も訊かないし、フローの身の上についても詳しく訊ねない。そのかわりに、自分のことも必要以上は話さない。

彼女は、求められれば相手の領域に踏み込むけれど、求められなければ踏み込まないし、決して彼女の領域に踏み込ませることはない。そういうことなのだ。フローは、それに、気づいた。

——壁を壊すには、こうするしか方法がないと思った。

だから、息絶えそうなマーガレットを抱えたイヴァンに声をかけたのだ。——善意では、ないのだ。

：フローは、今回はじめて彼女に逢ったわけではなかった。

(ロザは、私のことをおぼえているだろうか?)

口には決して出さない問いに、フローは目を伏せた。

——それは、幼いころの決め事。

朔月夜。暗闇のような空には、星が煌々と輝いていた。

魔女は開かずの間で皆の寝静まる夜中に独り、葉の開発をしている。

ふと、葉を作る手をとめて窓辺へと視線をやり、暗闇の中に浮かぶ星を眺めた。

ぽつりと呟く。

「わたしは、人間と距離を置かねばならない」

囁くような声音は、どうか眠っているだろう訪問者に聞こえぬよう。

彼女はいつだって警戒していた。

相談や葉の依頼によって、人間の心に立ち入ることを求められるならば、それに従おう。しかし——決して自分の心に足を踏み入れられることのないように。

だから、彼らが”客人”であることを忘れてはならない。

目を閉じれば、忘れてはならない残像が脳裏を駆け巡る。

——その人は、狂っていた。人間を愛した、愚かな、神の血をひく男。

所詮、魔女は魔女、人間は人間なのだ。寿命が遥かに違う。

普通、純血の魔女は一〇〇年をはるかに凌ぐ月日を生きる。それは永久にも等しい。そして、人間の血が混ざった魔女は、両親の血の寿命を足して二で割ったものとなることが多い。

他方、神の力を継ぎ、寿命は人間のもの、という魔女もいるが、その場合は力を使うたびに寿命が縮んでいく。そういった者の存在はごく稀である。

ロザ自身は魔女と人間の血を受け継いでいるため、寿命はおおよ

そ一五〇年ほどだろう。

きつと、何百年か後には、魔女も純血はいなくなり、人間の寿命と変わらなくなるだろう。けれどそれも、遙か未来の話。

ロザは、もう一度呟いた。

「…心の、距離を」

人間は知らないだろう、魔女たちが人間と距離を置く理由を。

人間を愛した魔女たちが、愛した者の死後、愛執ゆえに何十年も――何百年も狂う姿を。

「困ったな…」

マーガレットの眠る寝台の隣で独りごちるロザは、眉間に拳をあてて瞑目した。

「姫に、なにかあったのか？」

揺れる心をおし隠すような声でイヴァンは問うと、ロザは首をふった。

「いや、そうではない。その…薬草が、足りなくなったのだ」

ロザは手元の薬草を見つめる。

目覚めないマーガレットに処方しているのは、滋養強壯の薬だ。

怪我はもう心配ないのだが、眠ったままでは食事もできないため、栄養のある飲み薬を彼女に飲ませている。

だが、その薬のもととなる薬草がなくなったのだ。

前髪をかき上げ、溜息をつく。

「…すまない。わたしの計算が甘かった」

本当は今日、薬草の採集にいく予定だった。けれど。

ロザは窓から外を眺める。

大雨だった。しかも、必要な薬草は水辺にしか生えていない。もしかしたら、こちらの命が危ないかもしれない。

それでも、自分の失敗であることには変わりはない。――ロザは

拳に力をこめた。これは、薬師としての責任と矜持の問題だ。

「フロー、イヴァン、申し訳ないんだが、今から採ってくる。マーガレットを看ていてくれるかな？」

その言葉に、二人は目を見開いた。こんな雨の日に、なにを言っているのだろうか。

踵を返すロザの手を、フローが無然とした表情で掴んだ。

「…その薬草、水辺の植物だと以前、書物で読んだが。こんな雨の日に行ったら、あなたの命の方が危ない」

フローの鋭い指摘に、ロザは視線をさまよわせる。

「だが…」

「誰かを犠牲にして助かることを、マーガレット姫は望まない。彼女はそういう人だよ」

ロザの言葉を遮ったイヴァンが諭した。

理解はしているものの、納得はできない彼女の気持ちを汲み取り、フローはロザの手を強く握った。

「だったら、私とイヴァンが行こう」

「へ？」

目を丸くするロザに、フローはなおも言う。

「イヴァンは騎士だったから体力がある。私もあなたより体力はある筈だ。だから、姫君の面倒をみるのはあなたが適任だと思う」

イヴァンは苦笑した。――その通りだ。フローはロザの性格を正確に計算して、この言い回しを選んだと察し、後押しする。。

「ロザ、俺も彼の意見に賛成だ。お願いしていいかい？」

「……………ああ」

しぶしぶロザが頷くと、フローは名残惜しそうに彼女の手を離れた。

玄関扉をあけ、「行ってきます」と別れを告げる青年二人に、ロ

ザは戸惑いながら俯いた。：言おうか、言うまいか、迷った。けれど、言うことにした。

「いってらっしゃい：ちゃんと、無事に戻ってきてくれ」

人間と距離を置いている魔女。その彼女が、人間に「いってらっしゃい」と言ったのは初めてだ。

イヴァンは「はい」と笑みを浮かべる。

フローは花が揺れるように笑う。

そうして、青年二人は薬草摘みへと、雨の森に向けて歩を進めた。

ロザは早速、マーガレットの枕元で薬の研究を始めた。

なにかしていないと、薬草を摘みに行った彼らのことをあれやこれやと考えてしまう。

「：困ったな」

本当に、困ったことになった。

それまでロザは、深く他人に関わることなどなかった。それなのに、フローとイヴァン、マーガレットと共に過ごすようになり――彼らを頼ってしまっている。

前髪をくしゃりと握る。：こんなはずでは、なかった。

今回の来訪者も、仕事だけ依頼し、あとは魔女に委ねて終わるものだと、思っていたのだ。

けれど、彼らは違った。マーガレットの世話をするロザの傍にあり、手伝い、支えてくれている。

ロザは顔をゆがめた。

（深く、考えるべきでは、ない）

自分に言いきかせてはみるものの、うまくいかなかった。こんなこと、最近ではめったになかった。

頭をふり、薬草をつぶす手を動かす。拍子に、独特の鼻をつくにおいがした。

そのにおいに、遠い過去を思い出す。

——彼女に薬草の知識を授けてくれた人。たった一人の家族だった。

だが、彼は日に日に狂っていった。

人間に恋をした愚かな魔女。

愛執に蝕まれ、思い出は黒に侵された。

やがて彼が死んだ時、ロザは心のどこかで安堵していた。悲しくて寂しいのに、安堵してしまったのだ。

そうして彼女は、人間と関わらないことを決めたのだ。

ロザは奥歯を噛みしめた。

自分で決めたのに——どうしてこんなにも彼らのことが心配なのだろう。

不安に押しつぶされそうな心を隠そうと、マーガレットの美しい金髪をなでた。

「：マーガレット。君は、どうしてわたしのところに彼らを遣わした？」

ロザは、マーガレットの怪我がただの馬との接触事故だとは思えなかった。

それでも、彼女が事故の原因を探る事はない。割り切らなければ後戻りできなくなる。

事故については、当事者たちが話し合えばいい。自分は怪我の介抱するするだけだ。

今度はマーガレットの白い頬を軽くひっぱった。

「：——早く、目覚めてくれ、マーガレット」

これ以上深入りしないうちに。そう、心中でつけたすと、薬の研究を再開させた。

「…そっちは街だよ？」

イヴァンは雨を遮る外衣を翻した。

「…………。君、まさか水辺へ行くつもりじゃないだろうな？」

雨に濡れることも厭わず、フローは濡れる前髪を後ろへ撫でつけた。

いつも通りの無表情。それでも、イヴァンを小馬鹿にしていることだけはわかった。

「フローこそ、薬草を採るなら水辺だと…」

そこで、フローが大きな溜息をつきながら首を横にふる。

イヴァンは眉間に皺をよせた。

「なにがしたいんだ？」

自分で気づくことに期待しているのか、フローが口を開くことはない。ただ見つめるだけだった。そんな彼にイヴァンが目を瞬いた。しばし考える間にも、雨は絶え間なく降り注ぐ。フローは諦めたように口を開いた。

「普通、薬草は買うものだ」

「…………あ」

イヴァンは呆気にとられた。…いわれてみれば、その通りだ。ロザと生活するようになり、自給自足が当たり前のようにになっていたが、医者薬草を専門店に買いに行く。ロザが自分で薬草を採りに行くのは、人間に極力関わらないために他ならないのだ。

「別に、命をかけて水辺に採取に行きたいならとめないが」
冷ややかに嘆息され、イヴァンは首を静かにふった。

街へ行くと、その薬草はすぐに見つかった。

どうやら、一般の家庭でもちよつとした風邪の時によく使うらしく、小さな薬草専門店にも置いてあったのだ。

「さて、じゃあ帰ろうか」

イヴァンが振り返ると、そこにいるべき人物はいなかった。

「フロー!？」

一体どこに行ったのか。身なりからしていいとこのお坊ちゃんに見えたし、もしかしたら誘拐でもされたのかもしれない。

「…いや、それはないか」

イヴァンの脳裏のフローは間違っても簡単に誘拐される輩ではない。むしろ誘拐犯が裸足で逃げ出したくなるかもしれない。

そう思いいたり、一応辺りを見回してから、店を一軒一軒訪ねることにした。

——花屋、武具家、八百屋を訪ね…しばらく捜し歩いた時、代筆屋で探し人をやつと見つけた。なんだか無償に腹立たしい。

「こんなところでなにをしている」

恨めしそうに背後から声をかける。

するとフローは振り向くことなく答えた。

「ちよつと実家に手紙を。…君は出さなくていいのか？」

流し目を送られ、（男に流し目を送られても…）とうなだれつつも溜息をつく。

「…そうだね。そろそろ姫も目が覚めるだろうし、頼もうかな」

軽く言ってみたものの、心に冷たい風が吹いた気がした。少し寂しそうに目を伏せ、そう思う自分に苦笑する。

店の主に羊皮紙を用意させ、そこに文字を走らせた。

——馬の用意と、マーガレットを必ず連れて帰る旨を記す。

手紙が仕上がると、飛脚に丸めたそれを渡した。

「それはオールドリッジ家に頼む」

言ったのは、フローだった。

驚愕に見開かれた目で彼を見つめる。

「フロー…なんで姫の姓を知っている？」

フローは涼しい顔で口端を上げた。

「君たちのことは知っている。イヴァン・ラフェーエル・ティリヤード殿。連れの姫君はマーガレット・シャノン・オールドリッジ嬢だろうか？」

イヴァンは息を呑む。なぜ、彼はそこまで知っているのだろう。

（…不味い）

イヴァンとマーガレットのことが貴族界に知られれば、悪い噂がたつだろう。そうなれば、これまで仕えてきた主に恩を仇で返すことになる。そして、マーガレットの名にも傷がつく。

息を、呑んだ。

「誰なんだ…君は」

イヴァンの硬い声が店内に響く。彼らしくない鋭い目で、フローを見据えた。けれど、視線を受けた青年は興味なさそうに肩を竦めた。

「まだ言うつもりはない。…安心するといい。私は君たちのことを誰かにしゃべるつもりはない」

そうしてフローは飛脚に「じゃあ頼んだよ」といって金貨を渡した。

ロザは部屋の中をぐるぐる歩いていた。円を描いて歩き続ける。結局、青年らのことが気になって研究に没頭できなかった。いっそ諦めて、素直に待つことにする。

マーガレットを見下ろすも、彼女はやはりまだ目を覚まさない。

「暇だ」

一人ごち、次いで下唇を噛んだ。

（違う。そうでは、ない）

ロザは玄関扉の前へと向かい、そこで膝を抱えて座った。目を閉じると、雨の音が弱くなっていることに気づいた。

（迎えにいかうか？）

思いついた考えを否定するように、首をふる。なんでそんなことを自分がするのか。…でも。

（彼らは客人だ）

客人を迎えに行つてなにが悪いのだろう。

だが、それも、本当の心の言い訳だと気づく。

抱えた膝に顔を埋める。

…気づいてしまった。

彼らが客人だというのならば、なぜ彼らに頼みごとをしてしまったのだ。自分は、引き受けることはあっても、頼むことはしてはならなかったのだ。——境界線を、崩壊させてしまった。

だから、彼らが戻つてこないことが不安でたまらない。もしなにかに巻き込まれていたら、どうしたらいい？

——近づかないつもりだった。人間に近づいて狂つていった仲間をたくさん見てきた。あの人も、そうして狂つてしまった。わかつていたのに。

「早く、戻つてきてくれ」

小さな声で願つた。

刹那、扉を叩く音がした。

ロザは素早く顔をあげ、立ち上がる。

勢いよく扉を開けた。

「ただいま」

淡く笑んだイヴァンと、その後ろに立つフロアが見えた。

イヴァンが「この薬草でよかったよね？」と外衣から包装紙を差し出すと、ロザは唇をわななかせ、俯いた。

目の前の魔女の様子にイヴァンは首を傾げる。フロアが彼女に近寄ると、がばっと顔を上げ、彼らを睨めつけた。

「帰るのが遅いっ！ 別に心配なんてしてなかったが…あまりに遅いから…その…。そうだ！ もしマーガレットになにかあったらど

うしてくれるんだっ」

眉尻を吊り上げるロザは踵を返し、マーガレットの部屋へと向かう。

理不尽に怒られたイヴァンとフローは啞然と佇み、次いで小さく笑った。

確かに怒っていたロザ。けれど、その瞳は潤んでいた。彼女が感情的になったのは初めてだった。

二人は濡れた外衣を脱ぐと、ロザのあとに続く。

遅くなった事を詫びようとすると、ロザが先に言葉を紡いだ。

「：イヴァン、フロー」

彼らの気配に気づいた魔女は、ゆっくりと振り返る。そして。

「ありがとう。おかえり」

それは、やわらかい微笑みだった。心があたたまる、春のような、本当の笑み。

瞠目し、イヴァンとフローは手にしていた荷物を落とした。

再びロザがマーガレットの方をむいてしまうまで、青年ふたりは目を見開いたまま動けずにいた。

やがて意識が覚醒した時——二人は耳まで赤くなる。

青年らの異変に、ロザが気づくことはなかった。

太陽が昇りきっていない早朝。日課の野菜収穫をする人影が三人。例によって例のごとく、ロザ、フロー、イヴァンだった。

「泥がついてるよ」

そう言って、イヴァンは収穫の手をとめ、そっと親指の腹でロザの頬を拭う。

思わぬ行動に、ロザは目を丸くした。しばらく彼女が固まっていると、イヴァンはようやく自分のしたことに気づき、慌ててロザの頬から手を離す。

「す、すまないっ」

頬を赤らめて謝罪するイヴァンに、ロザは苦笑して首をふる。

「いや、むしろ礼をいわなければ。——ありがとう」

彼女が優しく笑うと、イヴァンはわずかに目を大きく開き、切なさを含んだ笑みを浮かべた。

「……失敗したな」

ひそかに二人の様子を窺っていたフローは呟く。そして、冷たい秘色の瞳を細めた。

「惚れ薬を作ってほしい」

イヴァンの発言の直後、ロザは茶を噴出した。

（…よかった。今日の茶に砂糖いれてなくて）

そこではない、とツツコミたくなる彼女の心中。

濡れた卓を拭くフローは視線をあげた。

「誰に使うんだ？」

静かな問いに、イヴァンは目を伏せた。

ようやく答えようとした時。

「無理だ」

ロザが問答無用でたたっ斬った。

そして、卓に大人しく座っている二人に命令する。

「そこに直れ」

「…もう座ってる」

フローのツツコミをロザが気にすることはなかった。

彼女は足を組むと、人差し指で卓をコツンとたたく。

「よく、この手の依頼を受けるんだが…無理なんだ」

ロザは目の前に座る青年らを見据えた。

「君たちは、恋をどこでする？」

フローとイヴァンは目を瞬く。

「えー…心？」

首を傾げながら答えたイヴァンの回答だったが、ロザは続けて問うた。

「では、心はどこにある？」

そこで青年らは眉を寄せた。

ロザは溜息をつく。

「つまり、そういうことだ。恋を心ですると多くの者は思っている。惚れ薬を作るならば、その心に作用しなければならぬ。じゃあ、心はどこにある？ 魔女の間では胸ではなく、頭からの信号によって動悸や興奮作用が得られると考えられているが…それを操作すれば、持続的な恋に落ちると思うか？」

「…無理だろうな」

フローが呟いた。それにロザも頷く。

「どんな病の薬も、癒えるまでは服用に継続性が必要になる。ゆえに、一度で持続性のある惚れ薬は作れない。もし一時的なものを望

むというのなら、それは興奮剤や媚薬だ。心は得られない。…それでも、イヴァン、君は望むか？」

イヴァンは苦渋の表情を浮かべた。

一時的では意味がなかった。本当に、好きにならなければ、幸せにはなれないだろう。

ロザは優しく訊ねた。

「誰に使用おうと思ったんだ？」

今度こそイヴァンは答える。その声は、とても落ち着いていた。

「…俺に」

フローは目を細めた。

イヴァンにとって、マーガレットは大切な人だった。けれど、それは女性としてではない。それだけのことが、事を荒立ててしまうきっかけになった。

銀鼠色の髪が顔にかかる。瑠璃色の瞳を翳らせた。躊躇うように、決心をした彼は、重い口を開く。

「俺の名前はイヴァン・ラフェーエル・ティリヤード。隣領地の隣にある男爵家の次男なんだ…」

イヴァンは視線をフローにうつした。

「フロー、君は知っていたよね？」

「…ああ」

二人の会話に、ロザだけが驚いた。彼らがここに来た時、顔見知りという風ではなかった。それにイヴァンはフローのことを詳しく知らないようにも見える。思わず首を捻る。

フローは至って無表情だった。もちろん表情は読めない。仕方なく、ロザは会話を促した。

「では、隣領地の主に騎士になるために仕えていた、ということではないかな？」

イヴァンは頷く。

「先日、騎士叙任式を無事終えたんだ。…だから、実家に帰ろうと

思った」

目を閉じた。――ずっと自分は騎士として兄の補佐をしながら仕えると思っていた。だが、皆が願ったのは、そうではなかった。

「父や兄は、姫と俺を結婚させたがっていたらしい」

苦笑したその顔に、ロザは歯をくいしばる。あまりにも痛々しかった。

自分の思惑とは別に、信じていた未来を捻じ曲げられた。ゆえに、素直に従えなかったのだらうと、ロザは考える。

「：マーガレットはなにか言っていたか？」

控えめにロザが尋ねると、イヴァンは困った顔をした。

「：彼女も家の決定に従うつもりだった」

：イヴァンは気づかないフリをしていたのだ。幼い頃に出逢った少女。太陽の守護を得たかのような美しい金の髪、碧の瞳は宝石のようだった。とても愛らしいと、思った。ずっと自分を追いかけてくる少女。気づいていたけれど、どうしても妹にしか思えなかった。「だから、俺は逃げたんだ：。騎士として家に帰って、もし追い出されても、どこかの貴族に雇ってもらおうと、そう、思った」

ずっと一緒にいた少女に、幸せになってほしかった。それでも、妹としてしか見れない自分に、恋人として愛することができず、何も。彼女がそれを求めていることに気づいてからは、距離を置くことでしか接することができなくなった。

家族も、仕える義父も皆、マーガレットとの縁談を望んでいたのを知っている。

そうして突如実家へ帰省すると決めた日。

マーガレットは先回りし、彼をとめようと森で待ち構えた。結果は知っての通り。

イヴァンの馬をとめようと、道を塞いだ少女は事故に遭ってしまった。

卓に置いた組まれた手を、力いっぱい握り締める。ロザはその手に自分のものを重ねた。

顔をあげる青年に、ゆっくりと首をふる。

「君が傷つく」

囁いて、手の力をやわらげさせた。

「君は、マーガレットに恋をして、皆の望みを叶えようとしているのだね」

ロザの優しい声音に、むしろイヴァンは居たたまれなくなる。

「：助けてほしい時は、正直にそういったらどうだ？」

それまで黙って話を聞いていたフローが、溜息をつく。

「本当は、嫌なんだろう？」

頬杖をつく。彼も気づいていた。イヴァンはロザに恋をしてしまったのだ。そうなった今、別の誰かと結婚することは、自分にも、そして相手にも幸せなことではない。

青磁色の瞳で射抜くようにイヴァンを見据える。

どうしようもなく、足掻く姿が、まるで昔の自分に重なった。そんな時、自分には救いがあったことを思い出す。だから、仕方がない。

「私がなんとかする」

フローは大きな溜息をついた。

魔女と来訪者

7 (前編) (後書き)

あと二話でこの章が終わります。

普段、愛憎的な物語を妄想する傾向にあるため、ほのぼのの難しさを知りました…。

なぜかサバサバした話になってくれない、と嘆いていたりしますが、完結を目指してがんばります。(独りごとな豊富で申し訳ありません)

——ずっと、恋をしていた。

出逢ったのは、ずっと昔。まだ幼さの残る少年は、銀鼠の髪をなびかせてこつちを向いた。そして瑠璃色の瞳を細めて笑った。

その一瞬で、少女は恋に落ちたのだ。

「姫」と呼ぶ声も、彼が苦笑するところも、全部好きになった。

だから、彼との縁談は願ってもないことだった。

けれど、彼はそれを拒んだ。

頭が真っ白に、なった。

彼をとめたかった。どうしても、とめたかった。その気持ちごとめられず、気がついたら彼の走らせる馬の前に立っていた。

心のどこかで、自分が死んだら……と考えていたのかもしれない。

(ねえイヴァン？ わたくしが死んだら、あなたは悲しんでくれる？

わたくしが死んだら……あなたはわたくしに今度こそ縛られてくれる？)

自分の汚さに自嘲した。目を覚ますのも拒むほど、自分のことを嫌悪した。

彼を縛るしかできないのなら、死んでしまうのもいいかもしれない。そう思う一方で、縛られてほしいと願う。

結局、自分が死んだら、彼だけでなく、彼の一族も困るのだ。――

だから、いい加減、起きなければいけない。

そうして、マーガレットは目を開いた。

「……ここは、どこ？」

見慣れない天井に、マーガレットは首をめぐらせた。

「つつ!?! まさか、記憶を失っているのか!?!」

ロザは一步後ずさって額に手をあてた。

イヴァンからすべてを聴いたロザたちは、マーガレットの様子を見に来たのだ。

「:なぜそうなる」

ツッコんだフローを、ロザは勢いよく振り返る。

「だ、だって言うではないかっ。記憶を失った人の第一声は『ここはどこ? 私は誰?』と!」

拳を握りながら熱弁する魔女の額を、フローは指で弾いた。

「いたっっ」

「姫君はこの家に来た記憶がないんだから、当たり前だろ」

「あ、そうか」

なにをやってるのかしら:とマーガレットは傍観していたが、彼らの背後にいる青年を見つけて微笑んだ。

「イヴァン、おはよう、でいいかしら?」

つられるように、イヴァンも微笑む。

「朝、というわけじゃないけど、それでいいと思うよ」

イヴァンはマーガレットの寝台まで近づき、彼女の手を握った。

「痛いところは?」

マーガレットは首をふる。

ほっとして口元を緩めた青年の顔に、マーガレットは俯いた。心配かけたのだと、知る。

「心配かけて、ごめんなさい」

涙を浮かべる姫君の頭を、騎士はなでた。マーガレットにとって、それはとても馴染みのあるものだが、妹扱いであることも知らしめられる。ほろ苦く笑う。

(やっぱり、どうしたってこの位置から抜け出せないのね)

余計に涙が溢れた。

「イヴァン、なにを泣かせているんだ」

呆れた女性の声に、イヴァンは振り返る。

「ロザ。ありがとう、目が覚めたみたいだ」

「それは見ればわかる」

それもそうだね、と騎士は笑った。

その表情に、マーガレットは目を瞠る。もう、自分の手の届かない場所に行ってしまったのだと思った。そして、それは自分が仕向けてしまったのだ。もう、どうしようもない。

それでも、まだ彼を好きな自分は諦めが悪すぎるのだろうか。

そこへ、フローがイヴァンとロザの間に割って入った。

マーガレットは目を瞬かせた後、困ったように笑った。フローとイヴァンとロザの関係が、一瞬にしてわかってしまった。

フローはマーガレットを見下ろす。

「なにかしら？」

少女が促すと、青年は温度のない声で言った。

「イヴァンは私がもらう」

「……………は？」

ぽかん、としたのはマーガレットを含めた三名。つまりはフローを除いた全名だった。

「そそそそれはなにを言っているんだ。こ、この国で同性婚は…。はっ！ 君は貴族っぽいが、国の法を変えてでもってことか！？」

ロザが混乱で話をあらぬ方向へ持っていく。イヴァンはこめかみを揉んだ。

「ロザ、落ち着いて。そうじゃないと思うよ。…違う、よね？」

少しずつ戸惑う口調に、マーガレットは肩を震わせた。

客観的に見れば、三人の相関図など一目瞭然なのだ。

そして、少しだけ寂しく思った。その相関図に自分は含まれていない気がした。イヴァンの自分が知っているよりも砕けた空気が、立入る隙がないことを物語っている。

呆れた顔で馴染みの二人を見つめるフローは首を横にふった。

「イヴァンを騎士として私が雇うと言っているんだ」

そこまで言うと、フローはイヴァンを真正面から吟味するように

見据えた。

「異論はあるか？」

イヴァンが息を呑んだ。フローは彼が仕えていたマーガレットの実家を知っているはずだ。彼女の実家は伯爵家。その家の決定に逆らうには、それ以上の地位と権力が必要となる。

マーガレットは、艶然と笑みを浮かべた。

「あなたが誰なのか、尋ねてもよろしくて？ わたくしの家格よりも上ならば、従わざるを得ませんわ」

挑発するような声音だった。

もし：とマーガレットは思う。

もしイヴァンがマーガレットからも、家のしがらみからも抜け出す術があるのなら、それを認めてもいいかもしれない。自分が彼をここに導いてしまったのだ。彼を傷つけてきた対価だというのなら、一度だけ、彼の自由に賭けてみてもいい。

フローは傲慢に笑った。まるで、国一の権力者のような笑み。思わず跪いてしまいそうになる。

「私の名前を言ってなかったな。フローレンス・ヴィンセントだ」

刹那、イヴァンとマーガレットは言葉を失った。

ヴィンセント。その姓は王家のもの。

記憶の中のフローレンスという名を思い起こせば、それは現王の弟――王弟殿下のものだと気づく。

――彼は。

跪こうとした騎士に、フローは手で制した。

「必要ない。今はちょっと遊学中で身分が中途半端だからな。まあ公爵の身分は約束されているから、側近がほしい」

そこまで聞いて、それまで無反応だったロザがやっと驚愕した。

「こ、ここ公爵！？」

反応の遅さにフローは天使の笑みを浮かべた。

「反応が遅く感じるのですが」

マーガレットは思わずツツコむ。ロザは急に四つん這いになり、

眉間をつまんだ。

(〵〵なんてことだ)

一人嘆いている姿に、イヴァンは顔を窺い見る。

「ロ、ロザ？ 体調でも悪いのかい？」

ロザは首を横にふる。そうではないのだ。

人差し指をフローに向けた。

「こ、これが公爵だなんて…領民が憐れすぎる」

それまで、よく働くのは主にイヴァンだったのだ。書物を読んだりする姿は見かけたものの、働く姿は収穫の時くらいだ。

指を向けられた王弟殿下は、おもむろに腕を組んだ。

「問題ない。私の奥方になる人が手伝ってくれるだろうからな」

否定しないことをツツコむべきだろうか、イヴァンは口端を引き攣らせる。将来の彼の奥方に合掌した。

「そもそも…フローレンス様のことをご存知ないのですか？」

素朴な疑問をマーガレットは訊く。彼は時の人なのだ。以前、とても話題になった。貴族の間で知らないものなど誰一人いないだろう。そんな人物なのだ。

しかし、ロザは「当たり前だ」と言わんばかりに頷いた。

「わたしは魔女だ。人間に極力関わってこなかった」

今回は前代未聞なのだ。

「魔女…。本当にいたのね…」

マーガレットはロザを凝視した。

ふと気がつけば、笑ってしまっていた。もう、仕方がないかしかなかった。不思議な魔女に心奪われた愛しい男。唯一縛り付けることのできる権力は、自分より遥かにに身分の高い男の前ではないに等しい。

大きな溜息を一つつく。もう、終わりにしよう。

「フローレンス様、わかりました。イヴァンはお譲りしますわ」

笑った姫君の顔は、どこか清しいものだった。

「：無事についたら、報告してほしい」

玄関口で俯き加減のロザはぽつりと呟く。：素直に手紙がほしい、とは言えなかった。

菜園の向こうには、馬車が見えた。オールドリッジ家の紋章が入っている。

マーガレットの目が覚めた三日後。帰りの馬車の準備も済んだイヴァンは、ロザに帰る旨を伝えた。魔女はなにも言わず、ただコクリと頷いただけだった。

そうして今日、実際に彼らが帰省する。

イヴァンはロザの手を握った。

「必ず手紙を出すよ」

上目で見つめるロザの視線を受け、青年は笑った。

「そんな寂しそうな顔しないで」

「：つつ。別に寂しくなんてないっ」

そっぽを向いた。顔を見られたら、確信されてしまう。黒茶の髪で、彼の視線を遮れたらいいと、思った。

「もとの日常に戻るだけだ」

自分の声が震えたことに気づき、ロザは下唇を噛んだ。

イヴァンは目元を和ませる。大切な女にだけ見せる、優しい笑みを浮かべる。魔女の手を握るそれに、力をわずかに込めた。

「必ず、また会いに来る」

力強い声に、ロザは顔をあげる。

「甘いお菓子も持ってくるから、お茶を淹れて」

軽く笑ったイヴァンに、ロザは気取ってみせた。

「：お土産があるなら、仕方ない」

「いつまでも御者を待たせるな」

さりげなくロザからイヴァンの手を外し、フローは追い払うように手を振る。

切なく笑んでいたマーガレットは、溜息をつく。

（イヴァンのこれは：天然なのかしら）

自分に向けてくれなかったそれも、第三者からの視点になってみれば、厄介なことこの上なかった。

（王弟殿下が不機嫌だわ）

仕方なく、マーガレットは急かすようにイヴァンの袖をひいた。

権力者が敵にならないうちに、さっさと立ち去りたい。

次いで、裾を持ち上げ、礼をした。

「それでは魔女様、王弟殿下、失礼致します。またお会いしましょう」

少女の優艶な表情に、ロザは「あ、ああ」と返す。

思わず、この美少女に落ちなかった騎士に首を捻った。

踵を返し、馬車に乗り込むとする二人に、フローは声をかけた。

「イヴァン」

振り返ったイヴァンは、フローが投げたなにかを受け止める。

目を瞬いた。

「これは？」

「紹介状だ。私は次期公爵であって、今はまだ王弟だ。もし公爵領に来たら、それを見せればいい。騎士として雇ってやる」

フローはやはり無表情で告げた。

見慣れた彼の表情に、イヴァンは苦笑する。

そのまま馬車に乗り込む騎士から、小さく「ありがとう」と聞こえたのを最後に、馬車の扉が閉じられた。

遠ざかっていく馬車を、ロザとフローは視界に捉えられなくなるまで見送った。

やがて、ロザは寂しそうに笑う。イヴァン馴染みの苦笑も、フローの無表情も、揃って眺める事ができるのは、今日が最後なのだろう

う。

なるべく元気に見えるように口端を上げて、フロアを振り返った。

「君も、今日帰るんだろう？」

「…そうだな。迎えの馬車が来たら」

「じゃあ、これでさよならだ」

赤茶の瞳を細めるロザは、腰で組んだ手に力を込めた。――独りには、慣れていた。それでも、それはずっと独りでいたから。一度でも誰かといたなら、今度は誰かといえることに慣れてしまう。そうして来る別れは、いつだって辛かった。だから、距離をいつだってあけてきた。

（…大丈夫。きっと、すぐまた独りに慣れる）

自分に念じ、フロアを見上げた時だった。

目の前にあるのは、フロアの顔ではなく、羊皮紙。黒々と文字が連なっていた。

「…なんだ、これは」

棒読みになった。

ロザは眉間に皺を寄せる。――なぜか嫌な予感がしてならなかった。

文字を読んでみる。

「……………」

読み終えた時期を見計らい、フロアは妖艶に笑った。天使のような悪魔の笑み。背後に黒い空気が漂っている気がする。

「納税金を要求する」

「……………」

ロザは顔を斜め下に向け、無言を貫いた。冷や汗が背筋を伝うのがわかる。

（なにか言わなければ…）と思った。

「わ、わたしは魔女だ。人間の決め事など関係ない」

「一権力者として、人種差別をするつもりはない」

「……………」
フ、フロア、ではわたしは滞在費を請求しようじゃない

か」

強がってフンツと鼻でせせら笑ってみる。

しかし、あえなく却下された。

「私の滞在日数とあなたがここに住み始めた月日を比べれば、納税金はまだまだ不足だな」

わざとらしい溜息。

ロザの肩に、がっしりと手が置かれた。

「ななな、なんのつもりだ？」

どもる魔女に、フローは首を傾げて囁いた。

「領主邸に連行する」

優しい声音も悪魔の囁き以外の何者でもなかった。

「き、君はこの領地の領主か！？ 徴税官かっ！？」

ロザはなんとか抵抗してみた。が、相手の方が上手であることに変わりはない。

「まあ、どちらでもないが。次期公爵だからな。現公爵に、親しい友人——この領地の主——の手伝いをしてこいと言われている」

ロザは口をあけ、放心した。

先刻までの、別れを惜しんでいた自分を殴り飛ばしたい。なんてことだ。納税しなければ、身柄確保ということか。けれど、持ち金はない。薬師として得る金は、毎回糖菓子とその材料に消えていくのだ。

馬車の近づく音が聞こえた。

（空耳であってくれ。：いや、その小石で馬車の車輪が外れてくれ！）

強く願ったが、むなしく終わった。

馬車の扉が開く音がした。

続いて、足音が近づいてくる。

そして目前でとまる。

「無事、身柄確保しましたか？」

冷たい声音だった。思わずロザが顔を上げると、そこにいたのは漆黒の髪的青年。魔女を見下ろすアメジストの瞳には呆れを秘めていた。

彼は片目だけのメガネのレンズをふきながら、「確保できたならさっさと乗ってください」と王弟よりも偉そうにいった。

顔を引き攣らせたロザは、戸惑いながらフローに問う。

「…随分偉そうだが…君の親戚かなにかか？」

「…いや、異端審問官だ」

「異端審問官…？ それにしては高慢…」

「そこ、聞こえてますよ。ほら、さっさと乗らないと、紐で腰くくって馬車で引きずりますからね」

絶対零度の声音で囁いた審問官に、ロザとフローは追いたてられ、馬車に押し込められた。

そうしてロザの領主邸行きが決定した。

「魔女と来訪者」はこれにて一章、完です。

とはいっても、人物紹介のような章だったので、来訪者メインでした。

次の更新は：まだ未定ですが、2月までには一話くらいがんばりたいです、はい。

一章は「イヴァンのターン！」とか意味不明なことを呟きながら書いていましたが、二章からはもうちょっと王弟がでしゃばります。予告どおりうだと、しかも怒涛の展開もなかったり、伏線すらなくない？と思わずにはいられません(orz)、お付き合いくださいましたら嬉しく存じます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3722j/>

魔女と〇〇

2011年9月8日14時21分発行